

# 宇都宮の民話

## 下ヶ橋(さげはし)の三つまたがや

江戸時代の半ば頃の享保(きょうほう)8年(1723)のことです。東下ヶ橋では大雨が降り続けていました。雨はいつまでも止まず、ついには洪水が起こりました。大水が鬼怒川の土手を破り、鉄砲水となって川岸の家や人たちを襲いました。

急に襲ってきた大水に人々は夢中になって逃げましたが、ほとんどの家が流されるほどのすごい勢いです、そうそう逃げきれものではありません。

そのときです、誰かが「あの木に登れ」と言いました。そこには三つまたのかやの大木がありました。その声を聞いた人々は、かやの大木に登り水の引くのを待ちました。

そのときの人々には、かやの大木が神にも仏にも見えたことでしょう。以来、尊い人の命が助かった人々は、このかやの木を大切にしています。

( 終わり )

